

昭和 6 3 年度

幼児期における遊びの意義と指導のあり方

～幼児の社会性の発達を観点として～

川崎市総合教育センター幼児教育長期研修員

幼児期における遊びの意義と指導のあり方

一 幼児の社会性の発達を観点として 一

奈須川 深雪¹

キーワード：幼児教育 幼稚園 幼児期 遊び 社会性 人間関係

はじめに

幼児教育における遊びの大切さは、保育者誰もが十分意識しながら、日々、子ども達に接していると思う。しかし、楽器遊び、体育遊び、ことば遊びなどと「遊び」と名のつく活動がいつのまにか多くなり、「遊び」という名がつけば、あたかも幼児にとって本来の遊びであるかのように錯覚をしているところがあるのではないか。そんな疑問がわいてきた。

「遊び」とは、どういう状態をいうのか。又、幼児にとって、遊びを通して何が培われるのかを改めて検討する必要があると感じた。

I 主題設定の理由

昭和62年12月に出された教育課程審議会の答申によると、幼児教育は幼児の主体的な生活を中心に展開されることとし、「遊び」を通しての総合的な指導により、進められることが重要とされている。それは、「遊び」を通して、ことば・人間関係・身体的な発達・表現力・「こと」「もの」に対する認識の基盤となるもの等、幼児期に養いたいものが多く培われていくからといわれる。

しかし、「遊び」の実態をみると都市化現象や親の養育態度の変化、核家族化、テレビやマスメディアの発達にともない、さまざまな問題が生じてきている。

このような現状をとらえ、改めて幼児期における「遊び」の意味を問い直し、保育における「遊び」の重要性に対して認識を深めなくてはならないと考える。

II 研究のねらい

この研究では、特に『遊び』を通して、人とのかかわりがどのように広がっていくのかに注目し社会性の育ちに重点をおいて、研究したいと考える。又、保育者として、どのような意識や態度で幼児の保育にあたらよいかを考察したいと考える。

そのため、次のような視点を設定した。

- ① 幼児期の「遊び」に関して、どこに問題点があるかを探り、解決の方策を考察する。
- ② 幼児にとって「遊び」とはどういう状態をいうのかを理解する。

¹ 川崎市立西丸子小学校附属幼稚園教諭（長期研修員）

- ③ 「遊び」を通して何が育つかを知り、「遊び」の意義を明らかにする。
- ④ 「遊び」の中で、人とのかかわりがどのように広がっていくのか、観察を通してとらえる。
- ⑤ 保育者として、幼児の「遊び」をどう見つめ、指導し、援助していくのかを考察する。

Ⅲ 研究の内容と方法

1. 幼児期の「遊び」における問題点

現代における子どもの「遊び」に関する共通した問題点を探り、その中から特に重要と思われる幼児期の遊びに関する問題について、文献や先行研究を通して理解を深めることにした。

小林芳文著「子どもの遊び」¹⁾では、遊び時間の不足、遊び場環境（空間）の悪化、養育態度の変化、遊び仲間の不在、マイカーの影響、テレビの影響、商業主義の影響、子ども自身の変化等によって問題となる状況が生まれてきていると指摘している。このことは、幼児期の子どもにもそのままあてはまることであり、子ども達が充実した遊びを行うための「時間」と「場所」と「仲間」を確保するとともに、「遊びの重要性に対する親の理解」を求めていくことが必要である。幼児の発達を阻害する社会的状況は簡単に解決できないものもあるが、地域や各家庭の意識変革により、解決できる面もあると考え、次の事柄について提案したい。

- ① 近隣の親同士の共通理解…○子どもが自由に行き来できる空間として家庭相互の連携をはかる。
 - 親同士、子どもの「遊び」の様子について情報交換をする。
 - 子ども達に一定のルール（遊び方・時間等）が生まれたら同調して、親も守るようにする。
 - 子ども同士に遊びたい欲求があったら、できるだけ大人の都合で妨げない努力をする。（休日の外出・家の都合での外出等）
- ② マスメディアの活用……○家族の中や友達の家同士で話し合い、大人も子どもも納得する視聴時間を決め、主体性を持って視聴する習慣を育てる。
 - 共通のイメージがもてるという点で「仲間同士の遊び」の題材として取上げる。
- ③ 園や地域の役割……○園でしか出来なくなってきた集団遊び等を積極的に取入れる。
 - 園や地域が、遊びの価値や必要性を乳幼児をもつ親に浸透させることに力を注ぐ。

2. 「遊び」とは何か

一言に「遊び」といっても、大人にとっての「遊び」から子どもにとっての「遊び」まで、そして、古典的理論から新しい理論まで、そのとらえかたは多様である。大人にとっての「遊び」は、仕事と異なる次元のものとしてとらえられる。そこで「遊び」と「仕事」ということについて考えていくと、未分化の状態から分化していく過程にある幼児にとって「遊び」は、仕事と同じ様に真剣で、生きるための力を得るための活動としてとらえることができ、大人にとっての休養や疲労回復のための「遊び」とは異なるということがいえる。幼児は将来、仕事をする力となるものも、「遊

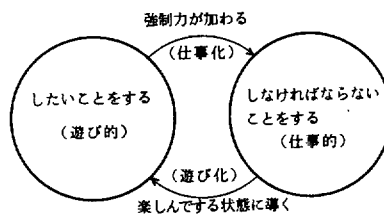
¹⁾小林芳文「子どもの遊び」光生館、1977年、12P～13P

び」の中で培っているといえるだろう。幼児の生活の中から「したいことをする」場面と「しなければならないことをする」場面を取り出し、図1のように考えてみた。

保育者の遊びに対する考え方により、本来、遊びであるべきものが仕事のようになってしまったり、「しなければならないこと」としてある活動も、遊び化することで、子どもの活発で自主的な活動となる場合がある。活動の特質もあるが、保育者の導き方が重要になる。

「遊び」の三要素²⁾として、次の3点があげられる。

- ① 心から楽しいと思うこと
- ② 他から強要されているという感じがなく
- ③ 何かの手段でないこと



—図1—

このことは、精神的に自由であるということとも、深いかかわりをもつ。保育にあたり、〇〇遊び、〇〇遊びという名目でいろいろな活動を行っているが、いつもこのことに照らし合わせ、真に遊びになっているかどうか問うていく必要がある。

3. 幼児期における遊びの意義

岸井勇雄は、「遊び」の中に耐久的努力・責任・社会性・生産的活動などを見出すように導かれるなら「仕事」や「勉強」に対しても、有能な人間としての基礎を導くだろうと述べている。³⁾

又、保育者であり、心理分析学者であるイギリスのスーザン・イサックは、「遊び」には身体的・知的・社会的・感情的意義のすべてが内蔵され、次の3つの主な機能があるといっている。⁴⁾

- ① 「遊び」は、発見・推論・思考を導く
- ② 「遊び」は、社会的関係をつくる橋渡しとなる
- ③ 「遊び」は、心の安定を導く

脳の働きから考えても、加古里子のように幼児期は脳細胞のからみ合いが増加し、図2にみられるような脳の重さの増す時にあたる。それは、最も脳の発達速度の著しい時といえる。特に5～7才の時期には、子どもの自主性をもとにした、やる気をひきだす行動や学習が最も効果的に大脳のからまりとなり位置づけられるといわれる。⁵⁾ このことから、自由で、自主的な集団の中での「遊び」が重要であるといえる。

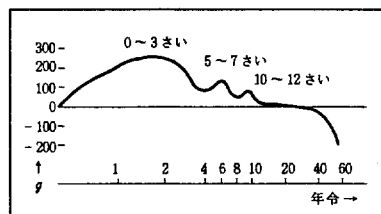


図2 脳の重さの増減状況

さらに、社会性の発達過程の中で、「遊び」がいかに重要であるかは、社会的適応のできない子の相談事例をみても明らかである。3才以降は、特に他の幼児達とかかわりを持ちながら、心ゆく

²⁾ 伊藤隆二・坂野登「子どもと遊び」日本文化科学社、1987年、3P

³⁾ 岸井勇雄「保育のあり方をたずねて」ひかりのくに、1988年、177P

⁴⁾ 森上史朗「幼児教育の基礎理論」上巻 教育出版、1983年、315P

⁵⁾ 加古里子「子どもと遊び」大月書店、1975年、167P～190P

まで「遊び」を経験させることが社会性の発達を促すことになる。

4. 観察と考察

(1) 継続観察を通して

幼稚園での「遊び」の実態と理論とをむすびつけ、照らし合わせて考えるため、市立高津小学校付属幼稚園と市立西丸子小学校付属幼稚園の2園に、月2回ずつ、6月～12月まで観察記録をとらせていただいた。抽出児を6名選び、「遊び」の様子と友達とのかかわりに焦点をおいて、組織的観察法に基づく方法で、自由な活動時に記録をとった。又、社会的行動の発達の観点として、パーテンの説⁶⁾と田中熊次郎の説⁷⁾を取り入れた。そして、表2のような観察用紙をつくり、その記録を、**A**、**B**、**C**、**D**のようにまとめた。

—表1—

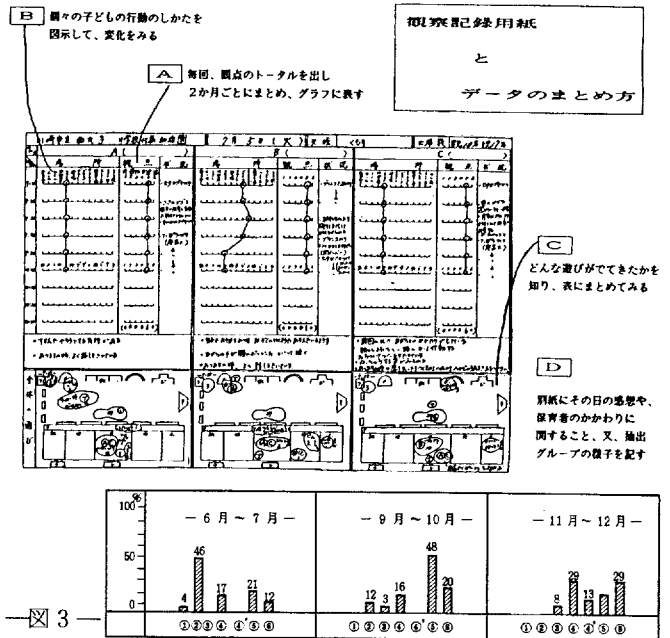
パーテンの説	観点	田中熊次郎の説
(1) 何もしないや静寂になるものがなければ興味も発動も表さない	1	(1) 何もしないや静寂なばつこ・動かない・固くおくるなど
(2) 周囲の行動・物の子の動きをみているだけで参加しない	2	(2) 周囲の行動・物の子の動きをみながらそばをやりみている
(3) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない	3	(3) 一人遊び一人一人一人で遊ぶ
(4) 同時遊戯物の子と同じおもちゃで遊んでいてもひとりである	4	(4) 平行遊戯物の子と同じおもちゃで同じような玩具で遊ぶ
(5) 遊びの目的・物の子の動きをみているだけで参加しない	4'	(5) おがままの手遊び・物の子の動きをみながら・物の子の動きをみながら・物の子の動きをみながら・物の子の動きをみながら
(6) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない	5	(6) こびりまわりの遊び・物の子の動きをみながら・物の子の動きをみながら・物の子の動きをみながら・物の子の動きをみながら
(7) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない	5	(7) 二人遊び遊びのやりかた・おどろき
(8) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない	5	(8) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない
(9) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない	5	(9) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない
(10) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない	6	(10) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない
(11) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない	6	(11) 孤立した遊び一人遊び・他の子と関係ない

—表2—

《継続観察のまとめ》

A 社会的行動の発達の観点の記録を個人別にトータルし、2ヶ月を1まとまりにし、グラフ表示して各々の行動の傾向を探る。

図3はM男のデータであるが、6～7月に②の割合が多く、他児の動きを傍観する行動が多かったことが表われている。M男は6月の砂遊びをきっかけにし、9月の砂遊びでは他児との関わりがもて、遊びの中で役割をもったり楽しさを味わったりするようすがみられた。11月～12月は傍観的態度はなく、活発に遊ぶ男児の中で、一緒に活動していた。



B 幼児の自由な活動時の動きを追うことで、個々の幼児の行動のしかた、遊びとの関連を考える。

ここでは、M男の例をとって、特徴的な行動のみられた4場面を取り上げてみる。

6月頃の傍観的行動は、他児の遊び方を観察し、自分自身の中に取り入れようとしている行動ととれる。M男は6月の砂遊びを通して、一人でも好きな遊びに集中し、自然に子ども達とかかわり

⁶⁾ Paten, Socialplay among pre-Shool children Psy. 28 (1933)

⁷⁾ 田中熊次郎「低学年児童の社会行動」金子書房 児童心理第3巻4号 1949年

を持つようになった。遊びが積極的になると表情も明るくこやかになり、ことばも多くなり、行動も活発化してくる。人にも物にもあまり積極的にかわらなかつたM男が、他児と一緒に環境の中で、人や物に興味を持ち、遊びに参加するようになった。自発的に自己表現をするようになったといえる。保育者はその子にとって適切な遊びの場になるよう、心掛ける。

㉓ 自由な活動時にみられた遊びを山下俊郎の分類を用いて表にし、遊びの傾向や発展のしかたを考えてみた。

㉔ A子を視点にして、A子のかかわるグループの友達関係の変容をみってみる。F子の強い力にひっぱられていたグループのメンバーが、いろいろなトラブルを通して、それぞれの好きな遊びにひかれていたり、グループがすこしずつ分散しはじめた。遊びと仲間との関係は密接である。F子も、自分のこと友達のことを考えるよい機会となった。

—表 3—

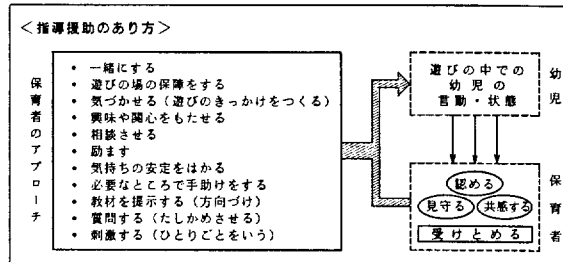
幼児の動き	日	遊びと行動の様子	Tの関わり
	25	<ul style="list-style-type: none"> ○他児の遊んでいる様子を傍観的に見ている ○廊下で一人であくびをしたり外を見ている(20分) ○活気がなく、ことばは少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ○M男の位置を確認する ○無理に声をかけ誘わない ○行動を観察する
	9	<ul style="list-style-type: none"> ○砂場でハチをみつけ、砂をかける ○筒にスコップで砂を入れる ○他児に筒を取られ嫌と言えない ○水くむ役に熱中 	<ul style="list-style-type: none"> ○行動を観察する ○見守る ○取り合いがおきても解決を子どもに任せる
	10 13	<ul style="list-style-type: none"> ○体を動かし、グループで遊ぶ仲間に入る ○自分から大きな声で話す ○表情イキイキ、ことばの数多い 	<ul style="list-style-type: none"> ○一緒に仲間に入りテープを持つ ○M男の誘いに同調し認める
	12 6	<ul style="list-style-type: none"> ○U男と二人で一緒に行動する ○ダンボールをお風呂に見立て葉を運んで運び入れる(6名の子とごっこ遊びを楽しむ) 	<ul style="list-style-type: none"> ○大型ダンボールを提供する ○発案実行の様子をみ危険の有無を確認する

(2) 他園参観を通して

いろいろな園での遊びの様子を見学し、地域や環境によって、それぞれに特徴があることを知った。その特徴をうまく生かして、遊ぶ場にしていく。

5. 指導援助のあり方

保育者として、どのような態度で指導援助していくかということを観察記録やそれぞれの園での保育者のかかわり方をみて一図4-1のように考えてみた。保育者が子どもたちの遊びを発展させるための存在として、自分自身をどう位置づけていくのかを認識していることが大切である。意識的に関わることを差し控えたり、子ども達だけでは対処できない時には、直接に指示したりすることも必要になるだろう。大切なことは幼児の言動や心理状態をありのままに受けとめ、認識し、一人ひとりの幼児を理解していくことが保育の原点であると考えられる。そのためには幼児が自由に考えを出し行動できる時間と場所を確保していく必要がある。又、幼児の自主性も重視していくよう心掛けたい。



—図 4—

IV まとめと今後の課題

遊びは本来仲間と一緒に楽しむもので、大部分の子どもは友達と一緒に遊びたが。仲間同士のコミュニケーションが遊びの楽しさ、おもしろさを生み出すのだろう。又、幼児期は日常生活の世

界と異なった非日常の世界（想像の世界）にひたり、何かになりきったり、何かに見立てたりして楽しむことができる。そんな遊びの中から大人の真似をしたりしながら人間として生きるための力（知的に生きる力、身体的に生きる力、共に生きる力）を養っている。

今後の課題として、次のような点があげられる。

- ① 幼児理解を深める場と方法を求める。
- ② 自由な活動時における問題行動をどうとらえていくか。
- ③ 1つ1つの遊びの具体的な援助のあり方を検討していく。
- ④ 園のみでなく家庭での遊びの援助をどのようにするか。
- ⑤ 遊びを他方向（表現・言語など）からも探り、さらにその意義や価値を知る。

幼児の成長にとって「遊び」が占める役割の大きさに驚き、改めてその重要性を再認識できたように思う。ここでまとめたことは、幼児の「遊び」に関する研究の入口の一部分であるように思う文献等による理論に基づき、幼児の姿をとらえることも保育者として必要な態度だと感じた。これからも、学ぶ姿勢を忘れず努力していきたい。

最後になりましたが、この様な貴重な機会をいただけたことに深く感謝すると共に、心暖まる励ましと御指導を下さいました伊藤和彦所長・センターの先生方、及び高津小学校付属幼稚園の先生方、所属園の高木健一園長・諸先生方に心よりお礼申し上げます。

・参考文献

- 小林芳文「子どもの遊び」光生館、1977年
伊藤隆二・坂野登「子どもと遊び」日本文化科学社、1987年
岸井勇雄「保育のあり方をたずねて」ひかりのくに、1988年
森上史朗「幼児教育の基礎理論」上巻、教育出版、1983年
加古里子「子どもと遊び」大月書店、1975年
Paten, Socialplay among pre-School children Psy. 28 (1933)
田中熊次郎「低学年児童の社会行動」金子書房 児童心理第3巻4号、1949年
愛媛県総合教育センター教育研究紀要 第51集、1985年
指定都市教育研究所連盟「地域社会における子どもと生活」東洋館出版社、1975年
西久保禮造「観察法による幼児理解」ぎょうせい、1972年

・指導助言者

川崎市総合教育センター第3研究室長 村井 守 川崎市総合教育センター主幹 齊藤 勝